



大方あかつき館報

第12号
2005年9月発行

あかつき

上林院の人と文学(四)

高知県経営者協会前専務理事 松本秀正

『明月記』

転院

妻の徳子は、近所の南坂病院に一晚いただけで、翌日の午後、院長の紹介で郊外の病院へ移されることになりました。移送される病院自動車の中で、麻酔薬のために眠り続け、咽喉が渇くらしく頻りに空唾をはき、時折、「あなた、あなた」と、夫元春の名を呼びます。

病院に到着して、ベッドに仰向けに寝かされた徳子は、身動きもせず眠り続け、空唾を吐くことを止めませんでした。院長室で、院長、伯母、元春の三人が話し合っている時、看護婦が慌しく駆けこんできました。

「今丁度お目覚めでして、廊下に出て、主人や伯母はもう帰ったかと叫んでいます。」

元春と伯母は、一瞬息をのみます。

院長は様子を見に出て行きます。

「僕たちの来たことを知っているようですね。」
と、元春が伯母に話しかけている所へ、院長が帰ってき

ました。

「『何でも判っているんです。主人や伯母は帰ったかと聞くから、もうさつき帰った、と言ってやりました。』

『そしたら、どうしたんでしょう。』

『涙をポロポロお流しになりましたよ。なんでも知っているんです。』」

九月の中旬、元春が面会を許されて病院を訪ねた時、徳子が、この病院へ移送されて来た日のことを話します。あの日寝台車の中には、夫と伯母のほかに誰かいたこと、その人が、途中で降りた（自動車の助手が、タイヤが破裂して、修理のため下車したのであった）こと、病院に着いて、夫と伯母が病室を出て行った時の心細かったこと、などを覚えていて、元春を驚かすのでした。

散歩

九月の終り、元春が病院を訪ねると、院長から、いつ退院してもよろしいと言われます。万全を期するため、退院は十日後にすることにして、その日は、外出の散歩を許されます。

二人で並んで歩きながら、徳子は、これまで看護婦に連れられて、二度散歩に出かけたこと、その一度は、子どもの時東京にいた頃、両親とお花見に行った所だった

こと、などを語ります。その所を読みます。

「『そうか、全然ゆかりのない土地というわけでもなかったねえ。』

『わたし怖かったり、苦しかったりしたけれど、こんな病院で生活したのもよかったと思うわ。』

元春は苦笑した。

『よかったということはないが、そんなように運命に素直に従うことが、結局運命に勝つことになるだろう。』」

この元春の言葉に、私は、作者の人生哲学が強く込められているように思います。

満月

散歩から引き返す頃には、大きな黄色い満月が、林の上に昇っていました。月は音もなく、肅々と昇っていきます。その道すがらで、二人は、ある出来事に会います。

野良帰りのおかみさんが、二人の前を歩いていました。手には、大きな薬缶と編笠をさげ、手甲脚絆、地下足袋を穿いて、疲れて歩いて行くのです。野良帰りの女は、古びた長屋の端っこの家へ入って行きました。三つか四つくらいの子が、暗い家の中から、窓先に走り出て来て、「かあちゃん」と叫びながら、両手を差しのべたのです。女は薬缶と笠を下に置いて、ふところを開け、一升徳利のように張った乳を出して、窓越しに子どもを抱きました。すると、子どもはその乳に武者振りついたのです。

「徳子は、余念なく、その様子を見逃すまいとしていたが、家陰に來ると突然、元春にささやいた。

『ちょっとあなた、あの女のひと羨ましいわね。あんなふうにお乳をやるのができて……。』

『うん、なかなか好いな。光子は、お前が入院するまでは、乳を飲んでいたが、もうこの頃は、お乳なんか忘れたらしいよ。』」

病院に着いた時は、院長は自宅に引上げていて、薄暗い灯が、玄関にひっそりと点っていました。元春は、徳子に十日後早目に迎えにくることを約束して、病院を出ます。その所を読みますが、この終わりの文章がこの小説を引締め、強烈な印象を与えます。

「病院を出ると、蟬の音が、あたりを取り巻いていた。月は中天に澄んでいた。」

一旦病を得た妻を擁して、行路を思えば、懸念は果てしなかった。しかし、七十日振りに妻を家に迎えることを思えば、胸がときめいた。元春は、さまざまのことを考える必要があるような気がしながら、月明かりの道を、黒い影になって帰って行った。」

『聖ヨハネ病院にて』

幸福なひととき

妻を看病するため、「僕」は、聖ヨハネ病院の精神科の一室で寝泊りすることになります。院長からは、奥さんの衰弱が激しいので、まあ快復は覚束ないものと思つて、看取りをするつもりでいてくれ、と告げられています。

これまで七年間も、寝起きを共にすることもなかったのが、思いがけなく、一室に同居できるようになった今の生活を、「僕」は、自分達の夫婦生活における最後の残光のように思え、出来るだけ気をつけて、妻にもやさしくしてやろうと考えるのです。

病院では時折、患者に牛乳の配給があります。妻は牛乳瓶を受け取ると、「あなた、ちよつと紅茶茶碗を取つてよ、分けて上げますから」と言うのです。

「僕」はいいよ。家に帰れば、何かにか食べられるんだから」と、いくら拒んでも、妻は聞き入れない。仕方なく紅茶茶碗を取つてやると、半分分けてくれるのです。目が見えないので、自分の分が少なくなつて、「僕」の分が、半分以上になることもあります。二人は、ベッドの縁に腰かけ、肩を並べて、牛乳をごくごく飲むのです。その所を読みます。

「『おいしいなあ。牛乳の味なんて忘れていた。』と、初めて飲んだ日に、僕はそいつだ。柔媚な口触り、つづいて乾いた咽喉を、冷やした乳が、滑らかに吸い込まれて行った。」

恢復が絶望的な妻の病氣と、戦争末期の深刻な飢えとに苦しむ凄絶な生活にあって、この場面は、二人の幸福なひとときが光彩を放ち、読者の胸を打ちます。

絶望

ある朝、妻にお相伴しようと思つて、家から持つてきた弁当箱を取り出すと、中に入れていた芋が、一切れもなくなつていました。ひもじさに我慢できなくなった妻が、夫の寝ている間に、盗んで食べてしまったのです。それを知つた「僕」の感情は、咄嗟に激しくなり、妻を責め立てます。精神を病む妻を興奮させて、どんな悪影響を与えるかも考えず、自制を失つて罵詈雑言を浴びせ、しまいには、いう言葉もなくなつて、口をつぐんだ時、「僕」は、深い絶望的な気持ちで悶えている自分の姿を見ます。

ある晩、家に帰つてきて夕飯を食べていると、電灯が消えました。「僕」は、暗闇の中で、蠟燭もわざと点けず食事を続けます。日の光も、電灯の光も射さない視力を失つた妻の世界を、実地に経験してみるつもりでした。しかし、それは恐ろしい世界だったのです。たちまち頭がのぼせ上り、胸の動悸が激しく打ち、思つてもぞつとする世界で、直ぐ蠟燭をつけます。一瞬にして「僕」は救われるのですが、そんな救いの全然ない妻の世界を思うと、罵詈雑言を浴びせ、腹を立てた、罪の深さに心が掻き乱れる思いになります。

クライマックス

「どんな生活にも、クライマックスというものがある。それ以後、生活はだんだん降り坂となり、遂には、終焉に至るのである。」とは、作者の有名な言葉ですが、「僕」が、聖ヨハネ病院で始めた生活のクライマックスといえ、ある日曜日の朝、構内の会堂で行われた彌撒に行つた時が、そのような気がするのです。

会堂へ入つて行くと、三、四十人ばかりの男女が、聖書を携えて座っていました。祭壇には、聖母の像が祭つてあつて、黄色いお燈明の光に照らされ、ドイツ人の神父さんが、会衆の方に向つて聖書を読んだり、聖母像の前で拝んだりします。

式が終りに近づき、神父さんがパンのかけらのようなものを、皿から取つては、並んでいる人達に与えていると、丁度その時、朝日が射してきました。

朝日の光は、会堂の中をパツと明るく照らしたのです。「僕」には、その光が神の来迎した姿とも思われ、そ

の時初めて一種の宗教的陶醉を覚えながら、昂然とした気持ちで、「自分は、如何なる基督教徒よりも、もつと基督教徒的でありたい」と呟くのです。

その彌撒の式で、敬虔な啓示を経験する所を、読むことにします。

「僕」が「如何なる基督教徒よりも、基督教徒的でありたい。」と、心に噛み締め呟いた時、僕には、それを具現すべき一つの用途が、心に浮かんできた。それは、もつと妻にやさしくしてやろうと思ふことであつた。それによつて僕は、「如何なる基督教徒よりも、基督教徒的でありたい。」との願いを、果たし得ると考えた。道は遠きに求むるに及ばず、また信仰は神に憑る必要はない。自分の身近かには、妻という廃人同様の人間が居るではないか。眼も見えなければ、頭も狂つていて、その苦痛を自ら自覚しない人間が居るではないか。この人間を神と見立ててはいけないうか。この人間のために、もつともつとやさしく、もつともつと自分を殺してやれば、自分は基督教徒ではないけれど、彼等以上に、基督教徒的であり得ないことはないはずだ。そうすれば、道はおのづから求められ、神はおのづから、身を寄せて来るにちがいない……」

絶望の淵で悶え続け、彌撒の式に列するため、会堂の中に身を置いた時、敬虔な啓示を経験し、心にかみしめて呟く場面は、たいへん感動的です。そして私は、作者の極めて柔軟で、強靱な精神が、バックボーンとなつて、いることを改めて感じるのです。

後書き

「僕」は、ようやく自分の第十創作集を、まとめ上げることができ、彌撒に列してから間もないある朝、病室で一氣に後書きを書き上げました。

妻は、しきりにそれを読んで聞かせてくれと言います。原文をそのまま読むと差し障りがあるので、端折つて、とびとびに、次のように読んで聞かせるのです。

「僕は、この後書きを、都下K町の聖ヨハネ病院の一室で書いている。僕は、午後だけ家に行つて、夜になると病院に帰ってくる。この慌しさの中で、暇を見つけては、漸く後書きを書きつけるところまで、事を進めるこ

とが出来た。僕は食器筆筒の上で、ペンを走らせている。外は雨である。」

そして小説は、次の文章で終わっています。

「読み終ると、知らぬ佛である、僕は思った。

『聖ヨハネ病院で、後書きを書くなんて、ハイカラね。貴方らしくないわ。』と、妻は冷やかした。

『うん、僕もあんたのお陰で、ハイカラな経験ができたよ。』と言って、僕は笑った。』

六、不朽の上林文学

今日は、『野』、『明月記』、『聖ヨハネ病院にて』の三作品を取上げ、お話してきました。これらの作品は、上林さんが四十歳前後に発表された、いずれも傑作です。『聖ヨハネ病院にて』は、戦時中に執筆され、「人間」に発表されたのは、終戦の翌年、昭和二十一年五月ですが、その同じ年に奥さんが、病院で亡くなりました。

上林さんは、昭和三十七年六十歳の時、脳出血を再発して倒れ、右半身と口が不自由の身となり、以来亡くなられるまでの十八年間に、寝たきりの生活を余儀なくされます。

そのような不運の中にあっても、文学に対する情熱を少しも失わず、妹睦子さんの想像を絶する献身に助けられ、創作に精進、『白い屋形船』、『ブロンズの首』をはじめ、後世に残る名作を次々に、世に出されました。

正に、文学に命を懸けた凄まじい生き方に、圧倒されます。

最後に、上林さんが生前親交の深かった、仏文学者河盛好蔵氏の「弔辞」の一部を紹介して、今日の話を終えたいと思います。

「上林君、あなたとともに、伝統的私小説のとりでを守ってきた尾崎一雄さんは、あなたの計をきいて、『本人は、人生からいじめられていたようなものだが、ひねくれず、善意の人生肯定派だった。えらい人だった。』と話しています。

僕も、まったくそう思います。

あなたは、流行作家にはなりませんでしたが、あなたの心からの愛読者は、日本国中に散らばっています。

上林文学は不朽です。」(完)

※おことわり

作品の中の「小見出し」は、読み易くするために付けたもので、小説にはありません。

前略 上林 晩様

上林晩文学館協議会委員 橋田秀代

上林さんごめんなさい。

実は私、いまだにあなたの読者とは言えないんです。難しいことじゃないんです。なまけているだけなんです。ところがです、上林さん、そんな私が、ひよんなことやらひよんなところであなたに会ってしまいました。これにはたまげてしまいました。けれどもそれから、この数奇なめぐり合わせの感動は、しばらくそのまま、しんとしていました。何も起こらなかったみたい。

なんせあなたと、一七二二年生まれのルソーと私が、蟻川の私の部屋で不意に出会ってしまったのですから。本をめぐっていると、これはよくあることですね。そういううちに、どの本が、誰が事の発端だったか、重なった下のほうの本がどうしたのか、思い出せない。

はるか昔、先ばかり急ぎ、あわただしく通り過ぎた本たちと遊ぶ。そんな静けさ。至福とは、こんなことでもありましょうか。老後の暮らしに金はいらん、と強がっています。

ルソーの「孤独な散歩者の夢想」。私はこの文庫本を一九七七年に購入しています。そしてこの版は、この年の四月に三十六刷版として出版されています。三十歳を目前にして、自分の行く末もしつかりしない、若い日の終わりに行くはざまをふらふら生きていた日々でした。

そしてこの社会も、石油危機を経験しながら、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と、小さな国の成功を、世界は注目した時代でした。しかしこんな理解も、山の小さな空しか見ていない、私の未熟さの産物だったに

違いありません。一九八二年の初夏、私はNYの書店でこのことを否応もなく知らされました。緯度の高い地方の木陰は涼しすぎ、異国の空には、頻繁に飛行機が飛んでいました。同じ世代の、この国の若者の大きな自由と、深い孤独に、私は胸を打たれました。世界は複雑でした。無邪気に悩める時代の通過点でした。

上林さんあなたが、ルソーの愛読者だったのは、戦時中でした。私がこうしたことの顛末を知ることが出来たのは、仏文学者の青柳瑞穂によってでした。彼が「孤独な散歩者の夢想」の訳者でありえたのも、どうやら、上林さんあなたがそのかした、すみません、どうやらあなたのルソー熱が彼を覚悟させたみたいですよ。

「私は戦時中、ふとした偶然から『夢想』に接する機会を得、その読後の感激を帝都残留仲間の上林君に洩らしたところ、はからずも同君もまたこの書の愛読者であって、かえって私はその翻訳を慫慂されたようなわけだった」

こんな内容が、著書のとがきに書かれていました。どうです、上林さん。あなたはこんなかたちで、三十年もの、私の本棚に棲んでいたものの見事にだままりを決めていました。青柳瑞穂のモウパッサンやボーヴォワールの「人間についても」も開いてみました。上林さん、あなたはやっぱりルソーのなかだけでした。

上林さん、あなたを記念して建てられた白い屋形船、松原の中の白い建物「あかつき館」では今年の六月、偶然にも、あなたの作品に登場するカリト坂のある土地に住まわれているT氏の個展が、まるで誰にも見られたくないみたいに展示されていました。T氏らしいです。私は彼の創造力は独自なものと思っていますが、ピカソみたい、と思ったものです。

非礼は、私だけではないようで、この幡多地域にもいるようです。私は、彼の絵で、人物が好きです。今回の作品の中にも何点かありました。その中で「青年」が好きでした。洋風な面立ちのほほはこけ、青白く、内面を見つめる暮らしの果てしない苦悩が刻まれていました。

雨の少ない今年の梅雨でした。上林さん、あなたは遠い過去の人なんかではなかったのです。私からあなたへの散歩は、ようやくここらあたりまでできました。



8月の催し風景

第3回 上林暁研究会開催



2005年8月6日(土)に第3回上林暁研究会が大方あかつき館で開催されました。

県外より約10名の来賓を迎えまた、地元町内外よりも多数の出席者があり、大変盛会に終わりました。

また、上林暁の常宿であった「朝比奈旅館」にて懇親会を行い、交流を深めました。

翌7日(日)には、上林暁研究会を主催された吉村稔先生に講師となっただき、2005年度第1回目の文学講座を行いこちらも盛会でした。

今年度も4回の文学講座を行いましたが、どの講座も多数の方に聴講していただきましてありがとうございました。



大方町紙芝居ボランティア

大方町紙芝居ボランティアの「おはなし玉手箱」のみなさんと毎年大型紙芝居を製作しておりますが、今年度は「上川口被爆ものがたり」が出来上がりました。新作発表は、上川口小学校の登校日に併せて2005年8月16日(火)9時より行い、児童や教職員、また地元の方達にも聞いていただきました。現在、大型紙芝居は4作品になりましたが、これからも活動を進めて行きたいと考えております。

興味のある方は、ぜひご参加ください。

